

文部科学大臣 萩生田光一 様
文化庁長官 宮田亮平 様

言うまでもなく文化庁の担ってきた役割は非常に大きく、今後も文化庁のサポートなくして成り立たない事業も数多くあると思います。個人的にも、アーティストとして参加したメディア芸術祭ではお世話になりましたし、数多くの友人知人の活動や、私が深い感銘を受けてきた数えきれない体験も長年に亘って文化庁の関与がなければあり得なかったことだらけだったろうと思います。基本的な社会のインフラとして必要な組織と思っています。だからこそ、今回の決定には大変強い危機感を覚えています。もし今回の決定が、強い「大衆の声」とされるものに配慮したものだとすれば、特定の思想信条に基づいて圧力をかける側を利することになる危険性があります。また、それ以上に、既に委託された審査員によって吟味されたうえで採択された事業の援助を、犯罪や明確な失策なしに撤回するのは、文化行政に関わらず大きな禍根を残しかねない判断ではないかと思っています。今回文化庁から出されている「不交付の理由」ももちろん拝読しましたが、事前に不明確な場合があることは、こうした企画にはよくあることと思います。過去に助成されてきた芸術祭で、事前に今回と同様に内容を把握できていなかった場合はザラにあるのではないのでしょうか。また、多くの方が指摘されているように、全体の一部に過ぎない企画が論点化することで、それ以外の部分を含む芸術祭全体への助成を撤回されたことも不透明な判断だと思っています。

こうした判断が前例となり、さらに文化庁以外の様々な事業援助についても行われるようになるのでは、という危機感も覚えます。特に、私は私立大学に勤める教員であり、その研究資金の多くを文部科学省の援助に頼っています。科学研究費補助金によってサポートされる研究の中には、文化、思想、歴史、社会、福祉などの人文諸学・社会系の研究も大きなウェイトを持ちますが、そうした研究に関しても、今回芸術祭に対して向けられた半ば恫喝的な批判が寄せられることも多くなってきています。今回の判断は、こうした分野にも向けられていくのではないか、という不安をも感じさせるものです。一度決めてしまったことを覆すのは、大変だろうと思います。ですが、まだ引き返せるはずだと思います。なにとぞ撤回していただくことを切に希望します。

一方で、今回の一連の騒動全体は、私にはとてもテンポが速く、背後にどういった人の動きや軋轢があるのかが、後にならないとよく分からないことが多い気がしています。この文面をご覧になり、「いや、貴方には見えてないことがある」と思っていらっしゃることも実際にあるのかもしれませんが、ですから、今回の文化庁の決定の背後に具体的にどのような動きがあったのかも、是非教えていただきたいと思っています。批判ありきではなく、何が起きているのか、なぜこういう経緯になったのかを理解したいということです。伝え聞くとところに寄れば、今回の決定には議事録が存在しないという信じがたい報道もあります。ということは、ごく少数のトップの方々の合議で決まったものなのではないかと拝

察します。逆に言えば、文化庁の中にも、文部科学省の中にも、この決定に対して忸怩たる思いをしている方、表立って言えない方が数多くいるのではないかと思います。確固たる芸術家であられる文化庁長官の宮田先生ご自身がそうでいらっしゃるのではないのでしょうか。

私は、文化は政治に無縁だとも、芸術を政治と切り離して考えるべきだという立場には立ちません。文化と政治には密接な関わりがあり、場合によっては反目することもあれば協調することも相互に利用する側面があることを知っています。今回のご判断の背後にも、芸術祭に反する文化的背景が強く存在することは明らかです。ですので、私たちが大切にしたい「文化」とはどのようなものなのか、それをこそ考えなければいけないわけですが、少なくともそれは多様な価値の共存を認め、そのために様々な実験的な試みに対して寛容なものであるべきだとまずは思います。今回の芸術祭は、確かに多くの問題点があったことに、結果的には私たちも気づかされましたが、それでもなお、いま書いた大義には添うべき試みだったと思います。そして、繰り返しになりますが、今回の助成打ち切りの決定は、少なくとも結果的にこうした大義や今後の試みを政治的に牽制する効果を持つことは避けられそうにありません。どうかいま一度ご検討いただきますよう、心よりお願い申し上げます。

2019年10月6日

岩崎秀雄

(早稲田大学教授, アーティスト・研究者)